
赤い薔薇

鹿野 魁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

赤い薔薇

【コード】

N8294E

【作者名】

鹿野 魁

【あらすじ】

「薔薇がどうして赤いか知ってますか？」俺の前に現れた男は、いきなりそう言った。男が語る、薔薇が赤い理由とは？

【どこかの国の酒場にて】

「薔薇がどうして赤いか知ってますか？」

視線を上げるとそこには男が立っていた。

声の高さで男と分かっただけで、遠目から見たらきつと女と見間違えていただろうと思う。なぜならそいつは、髪が腰まで長い上に女みたいに顔が整ってたからだ。

「……僕の話、聞いてます？」

俺が見とれていると、じれったくなつたのか、男はもう一度声をかけてきた。確かにこの喧騒の中じゃ、確認したくもなるだろう。

「ああ、ちゃんと聞こえてるさ」

俺がジョッキに残っていたビールを飲み干していると、男は勝手に俺の正面に座った。

軽くにらんでみるが、男は気にする様子無く酒を注文している。

「おい」

「はい？」

「誰が座って良いと言った」

男と飲む趣味は無い。

俺が凄みを効かせてこう言っても、男はやはり、動じる様子はない。

第一印象はもちろん、変な奴、だ。

そうこうしているうちに、男のもとに酒が運ばれてきた。今だけは回転の速いこの店が恨めしい。

俺は諦めてため息をつくと、酒を飲みだした男を観察することにした。

長い髪は亜麻色で、見ただけでも艶がいいことが分かる。多分、女たちは悔しがって見るだろうな。目もきつと同じ色。……曖昧な

のは俺が一瞬しか男の目を見なかつたせいだ。男の目を見つめるだなんて、気持ち悪くて俺には出来ない。

服はゆとりがあるが、足元などは動きやすいようになっている。傍に荷物が置いてあるから旅をしているんだらう。そういえば服の細かい装飾は異国の物だ。

「んで、俺に何の用だ」

仕方が無しに質問してやると、男はうれしそうにジョッキを置いた。

「用、と言うわけでは無いのですが、暇つぶしに付き合ってもらおうと思ひまして」

「暇つぶし？」

唇を湿らそうとジョッキに手をのぼすが、さっき飲みきつたのだから中身は空だ。

俺は軽く手を挙げて、酒を注文した。ここは馴染みの店だから、俺の好みは良く知っている。

「ええ。僕は話すことが好きなんです、生憎と旅の身。相手がいなくてですね。ですから、一人寂しくお酒を飲んでいるあなたに相手になってもらおうかと」

「あんたが女の代わりになってくれるのか」

一人寂しく、と言われたお返しに髪のことを言っただけ。けれど言われ慣れているのか、男は軽く笑っただけで受け流した。

「それで最初の言葉に戻るわけですが、薔薇が赤い由来を聞きますか？」

「あんた、吟遊詩人か？」

質問に質問を返すのもどうかと一瞬思ったが、こいつなら気にしないだらうと思ひ直して聞いた。

「いえ、違いますよ。先ほど言ったとおりのただの旅人です」

吟遊詩人なら金を払わなければいけないだらうと思っただけだが、これなら後で大金を請求されることも無いだらう。

とうの昔に運ばれていたジョッキを手に取り、俺は答えた。

「まあ、暇つぶしに聞いてやるよ」
酒を一杯飲み干すぐらいの時間なら、俺にだってある。

【薔薇が赤い理由】

昔々、ある国には美しい王女がいた。

それはそれは美しい姫君で、多くの男が嫁にしたいと望んだが、王女であるために平民の男たちは諦めざるを得なかった。貴族や他国の王族の者からもちろん求婚されていたが、王女の父である国王が許さなかった。

王女は庭に白薔薇を植えていたため、「白薔薇の姫」と呼ばれ、民に親しまれていた。それにちなんでか、王女を守るための近衛隊は、いつしか「白薔薇騎士団」と呼ばれるようになっていた。

王女には、ことさら気に入っている一人の騎士がいた。彼は貴族の出身でありながら、幼いころから王女を守り、王女のために尽くしていた。

王女も騎士も隠してはいたが、周りから見れば愛し合っているのは周知の事実だった。国王も、騎士の誠実さを知っているためか、二人の恋に何の口出しもなかった。実は国王は、自分の娘が愛し合っている人と結婚することを望んで、そのために他の男たちからの求婚を跳ね除けていたらしい。

しかし、妬む者は現れる。騎士はその者の陰謀によって、辺境の地へ行かなければならなくなった。そこは戦いが一番激しい地。命を落とすかもしれない任務だった。

騎士が城を発つ先日の夜。王女と騎士は、庭でこっそりと逢瀬を交わっていた。王女は自分の指が汚れることも厭わず薔薇を手折ると、騎士に差し出した。

「あなた様に、この薔薇をお預けします。わたくしの分身であるこの白薔薇を、必ずわたくしの元へお届け下さい」

騎士は薔薇を受け取ると、恭しく王女の手の甲へ口付けた。

「この薔薇に誓って、必ずやお届けいたしましょう」

騎士が手を当てた鎧の左胸には、白薔薇騎士団独特の、白薔薇の装飾があつた。

戦いは幾日も続いた。しかし、騎士の働きによつて、確実に戦いは終わりへと向かつていた。

峠での戦い。騎士は誰よりも勇ましく、誰よりも先陣を駆けて戦つた。長い戦いの末に、ついに勝利を収めた騎士勢。他の男たちが勝利に酔いしれ、喜んでゐる横で、一人の男が壁に寄りかかつて座つていた。

その男は鎧を自らの血で染め、息も絶え絶えな状態だつた。一番勇敢に戦つた男の左胸についていた薔薇は、鎧から離れ血に落ちていた。

「おい、王都に帰るんだろ？ 起きろよ」

一番親しい戦友の言葉に男は顔をあげた。

「もちろん帰るさ。約束したんだ。……でも、その前にこの薔薇を先に姫の元へと届けてくれないか」

男は震える腕で、薔薇の装飾を戦友に渡した。

「お前も後から来るんだらう？」

男はもう、戦友の言葉に反応を返さなかつた。

戦友は一度硬く目をつぶると、薔薇の装飾を男の服の切れ端で包んで立ち上がった。

戦友はひたすら馬で駆けた。何度も馬を乗り潰し、その度に馬を買い換えながら駆け続けた。

騎士の帰りを待っているだろう王女の元に、一分でも一秒でも早く辿り着けるように。一分でも一秒でも早く友との約束を果たせる

ように。

本来の半分の時間で王都に辿り着いた戦友は、すぐさま城に向かった。

血に汚れた格好のまま城に入れるとは思ってなかったが、騎士の名前を告げると、近衛長の取り計らいで王女に会えることとなった。

王女は血に汚れた姿に小さく息を呑みながらも、震える声で尋ねた。

「彼は……どうなったのです？」

戦友は跪きながら答えた。

「奴は殿下との約束を果たすために、私にこれを預けました」

戦友が差し出した包みを開けた王女は、その場に泣き崩れた。

王女のもとへと届けられた薔薇の装飾は、騎士の血で真っ赤に染まっていた。

【どこかの国の酒場にて】

「とまあ、こんな具合で薔薇が赤くなっただんですって」

いつの間にか話に引き込まれていた俺は、男のその言葉で我に返った。周りの喧騒が戻ってくる。

「結構、悲しい話なんだな」

手に持っていたジョッキには、まだ半分以上も酒が残っていた。

「その後は、どうなったんだ？」

一口飲んだ後に、俺は聞いた。

「その後、とは？」

「白薔薇の姫は、やっぱり白薔薇のままだったのか？」

こんな質問をされるのは初めてだったのか、男は軽く目を見張った。

「……さあ。残念ながらそのことについては僕も知りません。ただ」

「ただ？」

「その後戦友は、騎士の話を残すために旅に出たそうですよ」
飲みながら聞いていた俺は、そのせいで質問するタイミングを逃してしまった。

俺が口に含んでいた酒を飲み込んだころには、男は既に代金を置いて立ち去るところだった。

「おい！」

腰を浮かせて声をかけると、男はなんでしょう。と言わんばかりに首を軽く傾けた。

「今の話……どこまでが本当だ？」

言葉を選びながら聞くと、男はやっぱり微笑を浮かべながら答えた。

「この店の酒は、強いですから」

赤い薔薇

(後書き)

0	0
8	8
/	/
0	0
8	8
/	/
1	1
2	0
推敲 (文末部分)	投稿

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294e/>

赤い薔薇

2009年7月3日19時05分発行